

## 「ピラトの裁判」

2016年01月08日

ルカによる福音書 23章1節～5節。そこで、全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。ピラトは祭司長たちと群衆に、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った。しかし彼らは、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。

主イエスは最高法院で裁判を受けた。それは、律法に基づく正規の裁判ではなく「降格儀式」と言われる、人権を無視した怒号の中でのリンチ裁判であった。その裁判で、主イエスは「今から後、人の子は全能の神の右に座る」と言われた。これを聞いた最高法院は、ダニエル書で黙示文学的に表現された「人の子・メシア」を自分であるとしたと受け止めた。自分をメシアということは、自分を神とすることであり、神への冒涇に当たる。彼らは、主イエスを神への冒涇罪として、死刑判決を下すことができた。追い詰めてきた主イエスをようやく亡き者にすることができると喜んだ訳である。

神殿当局は主イエスをローマの総督ピラトの下に連行した。そして、「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました」と訴えた。これは、ローマへの納税義務を否定し、自分を王たるメシアだと言ってローマからの独立を目指し、ユダヤ民族を扇動する政治的犯罪者であるとする罪状である。

最高法院での裁判は、主イエスが自分をメシアとする神への冒涇罪という宗教的罪状であった。ところが、ピラトに訴えた罪状はローマに反逆する政治的罪状にすり替わっている。ここに、神殿当局の深い思惑がある。当時、最高法院は死刑判決を下すことはできたが、執行権はピラトに握られていた。後に、最初の殉教者になったステファノがユダヤ人の魂の故郷であり、ローマの属国であることの恥辱をはらすエルサレム神殿を冒涇したと人々の怒りを買って、石打の刑で命を落とす出来事があった。同じように、主イエスを神への冒涇罪として、石打の刑にすることもできたはずである。しかし彼らは、その方法を取らず、ピラトに訴えた。それは、自分たちで主イエスの命を奪えば、主イエスを尊敬して止まない民衆の反感を受けることは必定である。それを避けるためにピラトに訴え、彼の下で死刑執行をさせようとしたのである。神殿当局は自分の手を汚さず、ピラトを利用しようと企んだのである。卑劣であるが、権力者がしばしば使う手段である。

訴えられたピラトは尋問せざるを得ない。「お前がユダヤ人の王なのか」と、ローマに反逆する政治的な王なのかと問うた。主イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と答えている。ピラトがいくら尋問しても政治的野心を持つ者とは思えなかった。宗教者同志の争いであることを見抜いて、祭司長たちと群衆に、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った。しかし神殿当局は、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と、政治的罪状を言い続けた。主イエスは全く孤立して、神殿当局とピラトの前で、黙しておられた。